

平成25年度事業者主導型リスクコミュニケーション事業実施結果

【 三丸化学株式会社 】

宮城県環境生活部環境対策課

1 はじめに

化学物質は、私たちの日常生活を維持するために欠かすことのできない存在となっていますが、一方で、環境中の化学物質が人や動植物に悪影響を及ぼすレベルにならないよう適切な管理や取扱いが行われなければなりません。

事業者による自主的な化学物質の適正管理と排出削減も重要ですが、より合理的に環境リスクを管理し削減するためには、住民、事業者、行政が化学物質に関する情報を共有し、意見交換を通じて意思疎通と相互理解を図る「リスクコミュニケーション」の取組が有効です。

今年度は、昨年までのモデル事業から事業者主導型事業へシフトし、三丸化学株式会社で開催しました。

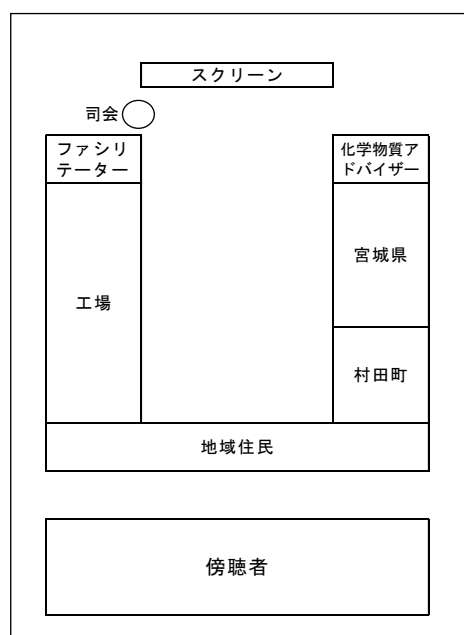
2 開催概要

- (1) 事業者 三丸化学株式会社
所在地：柴田郡村田町大字村田字西ヶ丘12-1
- (2) 日時 平成26年3月14日（金）
午後2時から午後4時まで

3 出席者

合計43名

- (1) 参加者 計23名
- | | |
|------------|-----|
| 住民代表者 | 6名 |
| 工場 | 10名 |
| 村田町 | 2名 |
| 宮城県 | 3名 |
| 化学物質アドバイザー | 1名 |
| ファシリテーター | 1名 |
- (2) 傍聴者（県内事業者）20名



<会場設置図>

4 プログラム

【司会：三丸化学株式会社】

- | | |
|-------------------|---------------|
| ・開会挨拶 | (三丸化学株式会社) |
| ・リスクコミュニケーション事業説明 | (宮城県) |
| ・化学物質セミナー | (化学物質アドバイザー) |
| ・企業紹介 | (三丸化学株式会社) |
| ・環境への取組み | (三丸化学株式会社) |
| ・工場見学 | (三丸化学株式会社) |
| ・意見交換会 | (進行：ファシリテーター) |
| ・閉会挨拶 | (三丸化学株式会社) |

5 意見交換会の内容

住民代表者からの質問や意見に対する回答は、次のとおりでした。

(1) 場内から排出された水の処分と燃えかすの処分はどのようにしているのか教えて欲しい。

- <工場>蒸留の工程から排出される水のうち、まるっきり水のもの、また一部溶剤が含まれている水というものを区別をしていただきたいと思います。まるっきり水のものに関しては、小型焼却炉中に噴霧して燃焼させており、一部溶剤を含んでいるような水に関しては、外部に廃棄物として委託しています。雨水以外は外に流すことはしていません。
- <ファシリテーター>水以外のものは燃やしているんですか。
- <工場>逆です。水は燃やしています。
- <住民代表者>水を燃やすというのはどういうことですか。
- <工場>燃やすというのは、小型焼却炉で一般ごみとかそういったものを焼却しているんですけど、水を噴霧して小型焼却炉内の温度をあまり上げないようにしています。
- <ファシリテーター>バーナーでですか。
- <工場>噴霧して蒸発させています。水に有機溶剤が含まれているものに関しては外部委託に出しています。有機溶剤が含まれた水というのは、タンク洗浄とかに使う水です。
- <ファシリテーター>では、焼却というのはどういうことですか。
- <工場>焼却というのは、水と判断したものになります。
- <ファシリテーター>その水はどういったものになりますか。
- <工場>例えば蒸留塔で原料の中に含まれる水の部分だけ抜き取る工程があります。そこから排出された水を分析して、間違いなく水だと判断したものを焼却炉で処理しています。
- <ファシリテーター>そうすると若干有機物が水の中に溶けている可能性があるということですね。
- <工場>そうです。だから燃やします。
- <ファシリテーター>説明が難しかったですけど、理解できましたでしょうか。
- <住民代表者>はい。なんとなく。
- <化学物質アドバイザー>あと水処理施設を最後に見せていただきましたよね。あそこはどのように処理しているのでしょうか。
- <工場>そちらでも排水処理設備がありますので排水を処理して、最終的には下水に流すようにしております。
- <ファシリテーター>行政のかたにお聞きします。下水で流した先はどんな扱いをしているんですか。
- <村田町>下水については、村田町、蔵王町、大河原町とか、それぞれの合流点で、下水に問題があればすぐわかるかたちになっており、阿武隈川下流域下水道のほうで最終的に処理しています。
- <ファシリテーター>変なものが流れていないか管理をして、さらに末端では処理しているということですね。
- <村田町>それぞれ市町村から流れてくる下水については、合流点で採水して検査しています。なにか異常があった場合には、どこが異常かを調べるかたちになっております。
- <ファシリテーター>工場では直接排水を河川に流して野放しにしているというわけではなくて、下水に出しているということですね。
- <工場>はい。雨水以外は外には流しておりません。
- <ファシリテーター>今の議論に対して、何か不明な点がありますか。まだ燃えかすの処分については議論されていないと思いますが。
- <工場>これも、焼却灰のことを言われていると思いますが、最終的には埋立処分になりますが、外部に委託しています。
- <ファシリテーター>色々不安がおありだと言うことですが、安心されましたか。
- <住民代表者>はい。

(2) 工場内にあるパイプラインは手動なんですか。

→<工場>基本的にコンピューターでコントロールされておりまして、人の判断が必要な、原料の小さい一斗缶からの仕込みであるとか、そういうところは手動で行っています。ただ、シーケンサーに関しましては、大震災の時もありましたけど、停電になった場合、安全側に稼動するよう設定しておりますので、万が一の時も安全になっております。

(3) 38人の社員で対応できていることに対して大変立派だと思います。村田町への企業の貢献度を教えて欲しい。

→<工場>一番の貢献は、利益を上げて税金を納めることだと思っています。あとは村田町に限らないですが、地域への貢献としては廃棄物不法投棄のパトロールも行っていますので、そういう活動もあげられるかと思っています。

→<ファシリテーター>今、廃棄物という話がありましたが、化学物質アドバイザーから廃棄物の管理というのは法律上はどうなっているんですか。

→<化学物質アドバイザー>廃棄物は委託する業者さんと契約をしていただいて、焼却灰であれば焼却灰が処理できる業者さんに出すというのが基本です。あとは処理しているところをご覧になっていただいて本当にちゃんとできているかというところを確認していただくというのが、ISO14000も取っていらっしゃるの確認までされているかと思いますが、その辺は大丈夫ですか。

→<工場>契約書の中には先ほど出たSDS（安全データシート）も含めた状態で契約を結びます。それから溶剤の混ざったどろどろした廃油は秋田まで年1回持って行って現地確認して処分しています。これは法律でもやらなくてはいけないことになっておりますので確認しています。廃棄物処理法は厳しいので、むしろやらないわけにはいかないようにはできています。

→<ファシリテーター>話が飛んでしまいますけども、PRTRの結果で廃棄物の量が結構多いですね。それは、さっきの話から言うと、ちゃんと業者に委託して廃棄物処分をしているのであって、自分たちで埋め立てたりとかそういうことをしているわけではないということですね。

(4) 工場に勤務する村田町民はどれくらいいるのか教えて欲しい。

→<工場>実は、村田町から通っている社員は1名しかおりません。半数以上が仙台市から、あとは大河原町、蔵王町、白石市、丸森町から通っている社員が多いです。ただ、実家は村田町でほかの市町村に嫁いだ人は何名かいます。

(5) 健康診断による異常はないか。

→<工場>労働基準法で健康診断というのは決められていて、年に1回の定期健康診断を実施しております。そのほかに有機溶剤を扱っているということで、特殊健康診断というのを定期健康診断のほかに半年に1回行っていますので、そういう方に関しては年に2回行っております。過去からの通知を個人ごとに集計していますが、特別最近体調異常という社員もいないようでして、健康状態はいいのかなと思っています。ただ会社全体としては最近の一般的なことですが、メタボに引っかかっている社員も増えてきているのかなという感じがしています。

(6) 人数も少ないのに、会社規模は大きくなってきている。従業員に無理はないのか。

→<工場>自動化できるものは自動化してなるべくコンピューターで制御しています。また、一番は仕事量が多くなり無理になりそうなときは、現場の主任（課長がいるときは課長）の判断で機械を止めてしまい、無理をしないようにしています。

6 実施の様子



<工場内>



<工場内>



<化学物質アドバイザーによる講演>



<工場からの紹介>



<工場見学>



<工場見学>



<意見交換会>

7 事業者主導型リスクコミュニケーション事業を実施した感想【三丸化学株式会社】

ありのままの会社の姿を地域の方に見ていただき、その結果明らかにされる不信や不安に対して、住民、行政、会社の三者が納得できる形で解決策を探る。地域に根ざすということは、そういう事だと考えて、リスクコミュニケーションを実施しました。

事前、事後のアンケートや、意見交換の場での質問から、参加者が情報交換の必要性に関して、共通の認識を持っている事が判り、リスクコミュニケーションが、弊社だけでなく地域にとっても意義のある事であることが確認できました。

スケジュールの面でも、社内のパワーの面でも、多少無理を押しとおしてのリスクコミュニケーションでしたが、今後も継続的に地域との交流の場を持ちたいと考えています。

8 協力

事業の開催に当たっては、化学物質アドバイザー派遣事業事務局の御協力をいただき、化学物質アドバイザー及びファシリテーターの派遣を受けて開催されました。